



シェイクハンド

第33号
H23.9

～静岡県訪問看護ステーション協議会便り～

なやみは半分、よろこび倍増

さあ みんなで手をつなごう!!

「大災害」から考えること

訪問看護ステーション協議会 会長 佐藤 登美

3月11日午後、三陸沖を震源とするM9の巨大地震の発生と津波、さらに福島原発事故の発生と続いて、その規模から私たち日本人にとって未曾有の経験になりました。死者は1万5千人、行方不明者5千人、負傷者5.7千人。現在も一時避難所や仮設住宅で不自由をしている方々は多く、この暑い夏に大変です。こうした人々の中には目の前で家族を喪うなど心に深い傷を受けた人もあり、これを癒やすには長い時間がかかりそうです。また津波によって暮らしていた家屋や場所を失い、思い出のつまった町や村は破壊され見るも無惨な状態になり、積み上げられた瓦礫が海岸線を埋め尽くしています。その片付けも、TVの映像を見る限り思うように進んでないようです。さらに、原発事故に関しては放射能物質の飛散や汚染の状況が人の目に見えない分、全くもって脅威的です。当初より国民に情報が正確に伝えられなかったこともあり、不安は募るばかりです。風評被害を止める方法がありません。といった人の命と暮らしの惨状が続いていても、季節は春から梅雨へ、そしてとんでもなく蒸し暑い夏へと来てしまいました。

私たち訪問看護に携わる者にとって、今回の震災がもたらした無残で甚大な影響にただ心が痛みます。特に、訪問看護の利用者の多くは災害弱者です。地震が来た時、咄嗟に逃げ出せなかった利用者はどんなに多かったか。たとえうまく救済されても、毎日服薬している薬が切れ、交換するカテーテルがなくなり、吸入の酸素がなく…といった状況は想像に難くないところです。どの被災地でも人々が「地獄だった」と言う時、ここには少しの誇張もないでしょう。その地獄にあって、保健師や看護師の活躍が報道されていましたが、この中にはおそらく訪問看護師も入っていたことでしょう。しかし災害は起きてしまったからでは、手の施しようがない。した



がって、広い意味での減災への取り組みこそ重要です。そこに人の叡智を結集した周到な対策を作るべきだと思います。

それにしても、今回の大災害では、人のいのちのあつけなさをつくづく思い知らされました。だから余計に、“ケアする力”を上げたいです。今、厚労省は特定看護師の法制度化を進めていますが、それよりも「訪問看護師」の技術強化とその資格制度化を進めてほしいと切望致します。というのも、地震ばかりでなく、避けがたく“後期高齢者の急増”という大波が、そこまでやって来ているからです。みんなで声を挙げていきましょう。

(平成23年8月9日)





平成23年度 通常総会報告

平成23年度通常総会は、6月18日、静岡県総合社会福祉会館において、静岡県健康福祉部長寿政策局介護指導課課長 岩田信夫様を来賓にお招きし、開催されました。

会員数111事業所数のうち、出席は63事業所、委任状は36事業所で、会員の過半数の出席をもって総会は成立しました。総会では、以下の議案の審議が行われ、全て承認されました。

1. 平成22年度事業報告・決算報告
2. 平成23年度事業計画・予算
3. 平成23年度静岡県訪問看護ステーション協議会役員

【平成23年度 静岡県訪問看護ステーション協議会役員紹介】

会 長	佐藤 登美	社団法人 静岡県看護協会 会長
副 会 長	篠原 彰	社団法人 静岡県医師会 副会長
副 会 長	上野 桂子	社会福祉法人 聖隷福祉事業団 顧問
理 事	櫻井 悦子	訪問看護ステーション千本 所長
	石井 由美	訪問看護ステーションなかいず 所長
	多田 みゆき	訪問看護ステーションひより 所長
	小野 英代	長岡訪問看護ステーション 所長
	中山 力英	社団法人 焼津市医師会 副会長
	三浦 さえ子	訪問看護ステーション清水 所長
	竹澤 まゆ美	訪問看護ステーション萩 所長
	谷崎 恵子	訪問看護ステーションはたるしずおか ディレクター
	高井 由美子	コミュニティセンターももの家 統括責任者
	垣野内 恵子	訪問看護ステーション浅田 所長
	大澤 三枝	袋井市訪問看護ステーション 管理者
	鈴木 恵美子	訪問看護ステーション大平台 所長
	飯田 美保子	訪問看護ステーションはまな 所長
監 事	池田 純介	社団法人 三島市医師会 会長
	小長井 信子	社団法人 静岡県看護協会 常務理事
顧 問	村上 作之	社団法人 小笠医師会 参与
東部支部長	櫻井 悦子	
中部支部長	三浦 さえ子	
西部支部長	垣野内 恵子	

広報委員 ◎石井 由美・竹澤まゆ美・大澤 三枝
 研修委員 ◎谷崎 恵子・飯田美保子・多田みゆき
 総務委員 ◎高井由美子・小野 英代・鈴木恵美子

事務局 鈴木 恵子・鈴木 由夏





全体研修会報告

東部支部 望月 愛子

1. テーマ：ハグとユーモアを添えた在宅緩和医療
を实践して
2. 講師：おげんきクリニック院長
岡原 仁 志 先生
3. 開催日時：平成23年6月18日(土曜日)
15:00～17:30
4. 会場：静岡県総合福祉会館シズウエル
5. 参加者：89名



今回の研修は心温まる楽しい研修でした。講師の岡原先生の人柄が伝わり、終始笑顔で研修に参加することができました。先生の自己紹介とクリニックの紹介から始まり、「ハグ」と「ユーモア」を添えた医療の实践をご紹介して頂きました。岡原先生とパッチアダムスと「ハグ」との出会い、在宅医療に力を注がれた思いから「ハグ」と「ユーモア」を添えた在宅医療の实践事例、地域での取り組みが紹介されました。『在宅医療のポイントはチーム力と看護力である』は、とても印象的でした。スライドの中で白血病の男の子の言葉が紹介されました。「僕は泣きながらこの世に生まれた。その時みんなは笑ってくれた。もうすぐ僕はこの世をさる。今度はみんなが泣いている。だから僕は笑いながら死んでいく。」胸が詰まる思いでした。他にも岡原先生と患者様、そのご家族の温かい写真やテレビ放映された映像が流されました。人は誰しも最期を迎えなければなりません。最期の自分の人生のクライマックスに自分がしっかり主役となり自分らしく輝き、周りの人に感謝し拍手喝采でおくられたら、『本当に生きていてよかった。生まれてきてよかった。』と実感できるでしょう。本来なら非常に悲しく、誰もが避けて通りたくなるような最期の場面を先生は「ハグ」と「ユーモア」を添えて患者様やそのご家族の支援者に、素晴らしい終末期のプレゼントをしているかのようなようでした。また、研修の中で『自分の死生観』を持つこともお話しされていました。生き

ていることに喜びを感じ、また、周りの人の温かさを実感し人は死生観を持てると思いました。研修のなかで、関わった方々のエピソードや写真等を紹介していただき、医療者と患者・家族というより、人と人との関わりを強く感じました。岡原先生が『パッチアダムス』の影響で実践されている医療は患者様やご家族との信頼関係を築きやすく、終末期を迎えた患者様にその人らしく、ご家族と共に楽しみながらお手伝いができることを実感しておられました。

在宅で、様々な健康問題を抱えて生活している方々、そしてそのご家族に私たちが出来ることはなんだろうか、『思いやり』と言葉にできても、それらが利用者様やご家族に届かなければ何の意味も持たないでしょう。日々の忙しさ、諸々の雑用で失いがちの『心』を今回の研修会で改めて考えさせられるきっかけとなりました。冒頭のスライドに「思いやりの医療」・「ハグ」・「ユーモア」の種をお持ち帰りくださいと書かれていました。この研修で岡原先生から頂いた種をしっかりと持ち帰り、丁寧に育て、個々のステーションで素敵な花が咲かせられるよう元気をいただいた研修でした。また、研修中に照れながらもハグを皆で実践しました。慣れないことに照れ笑いや笑い声がわき立ち楽しい研修でした。自分達の出来る事から、自分達にあった「ハグ」・「ユーモア」・「思いやり」が自然の中で生まれることを祈っています。





ステーション紹介

東部 訪問看護ステーションなかいず

石井 由美

皆様こんにちは、私達は、JA静岡厚生連リハビリテーション中伊豆温泉病院を母体とする、「訪問看護ステーションなかいず」です。平成10年4月に開設し、常勤看護師4名、PT4名、OT1名で伊豆の真ん中の地域で広範囲に訪問しています。事務所は修善寺駅前で、実習生には交通至便な立地です。伊豆は海と森と緑と清流に囲まれ、観光スポットは数知れず、季節の移り変わりを感じながら空気に癒されての訪問は美肌効果もバツグンです。対象地域の修善寺・中伊豆・天城湯ヶ島地区は、人口35,000人中30,000人強が居住し、65歳以上の人口は9,000人、高齢化率29.6%。明るく、暖かで、安心感のあるサービスをモットーに、地域の方に密着した看護・リハビリテーションの提供と周囲のサービス事業所との連携を心掛けています。自慢は、看護師とリハスタッフが環境の調整や福祉用具や機器の選定に積極的に協力し、利用者さんのためにチームで動けることです。1人が声を上げると皆が集まる、業者さんも巻き込まれてしまう、そんな雰囲気元気なステーションです。

最近では三次救急病院のDPC導入等が進み、短期間の入院ののち外来化学療法、というケースも当たり前になってきました。日々、病状や介護の状況が変化中、不安を抱える家族に訪問して手助けすることによって少しずつ対応出来ていく様子を確認できることが看護のやりがいに繋がっていますが、在宅医のバックアップが不可欠で、この地域では

本当に不足しています。医師を中心とした地域での看取りのネットワークが出来るよう、少しずつでも在宅支援診療所が増えることを願ってやみません。

目下の課題は災害対策の見直しです。先般の管理者養成フォローアップ研修で、宮城県の管理者の講師から東日本大震災の経験を踏まえ、管理者はどう動いたらいいか学びました。マニュアルを早急に策定し、実施訓練したいと考えています。

リハスタッフはともかく、看護師の平均年齢は48才、世代交代が急がれる所ですが、知的好奇心とモチベーションを維持し、訪問看護・リハビリテーションを地域に発信し、住民の皆様が安心して療養できる環境をもっと良くしていけるように頑張っていきたいと思っています。

次は、訪問看護ステーションみなみさんです。



中部 訪問看護ステーションふじえだ

原木 志げり

こんにちは。「訪問看護ステーションふじえだ」です。藤枝市の訪問看護ステーションから社会福祉協議会へ移され、5年目をむかえています。現在は常勤4名、非常勤4名、事務1名で活動しています。

私達の事務所である「藤枝市社会福祉協議会在宅福祉センター」は今年3月、瀬戸新屋という所に移転しました。新しい建物で、当ステーションはその2階に事務所があります。場所は、ほぼ市の中心に位置しているため、各種手続きや訪問活動に関して

は以前より動きやすくなっているように感じます。

さて、御多分に漏れずというのは言いすぎかもしれませんが、当ステーションでも看護師の高齢化が進んでいます。できれば若手の看護師さんを確保し、訪問看護の次世代を担っていただきたいと、スタッフ一同日々考えている次第です。

日々の訪問看護では「利用者の立場に立ったサービスの充実」を方針とし、24時間体制で在宅療養者やその家族のサポートをしています。新しい試みと



して、昨年「重症心身障害者、親の会」との関わりのある施設やサービス事業所でのシンポジウムが開催され、シンポジストの一人として参加させていただきました。これは私達が、今後の訪問看護を考えていく中で、大変貴重な経験となりました。また地区社協の意見交換会等にも出席し、各地域での問題、さらには今後起こりうる災害に備えた準備についても考えを深める良い機会になりました。訪問看護の利用者や、その家族の方達とも災害時の対応についてのチェックを行っています。

私達は今まで多くの療養者とそれを取り巻く多くの人々との出会いの中で、他では学ぶことのできない貴重な事を勉強させていただいています。これからも人と人との関係と、くり返すことのできない日々を一日一日大切に、過ごしていきたいと考えています。



次は、訪問看護ステーションはきりさんです。

西部 ウェルライフ地域リハビリテーション・看護センター

岡本 佳子

皆様こんにちは。「ウェルライフ地域リハビリテーション・看護センター」です。

私たちの事業所は、袋井駅から北へ徒歩10分ほどの場所にあります。

平成15年からスタートし、今年で8年目になります。当初は看護師3名(2.5名)と作業療法士1名のスタッフでした。御利用者様も1名から始まり、本当にゼロからのスタートでした。現在では、看護師6名、理学療法士2名、作業療法士2名、介護士1名、運転手1名、保育士1名で活動しています。

ウェルライフとは、「植えるライヴ」と英語「well life」の両方の意味を持たせています。ライヴとは「命」「生活」「生き方」などをイメージしており、どんな人にもよい人生を歩んでいって欲しいと願って命名されました。

私たちは、「ウェルライフ」をモットーに、自宅療養をされている御利用者様とその御家族様が安心して在宅で暮らすことができるよう日々頑張っています。

訪問看護のほかに訪問リハビリも行っており、それぞれの立場からご利用者様のことを考え、話し合い、よりよい看護、リハビリを提供できるよう努めています。

また、療養通所介護も行っていて、そこでは御利用者様を1日に1～2名に絞って、訪問介護と連携した手厚い看護サービスを心掛けています。

現在、スタッフはみんな子育て中なので、仕事だけでなく、子育ての悩みもお互いに相談し協力しながら、仲良く元気に働いています。保育士による託児も行っているので、小さな子供を持つスタッフも安心して働くことができる環境が整っています。仕事も家庭も両立できる明るく楽しい職場です。

今後も、御利用者様と御家族様に対して誠意を持ってサービスを提供し、在宅生活をよりよいものにして頂けるよう努力していきたいです。

次は森町訪問看護ステーションさんです。





災害支援体験記

訪問看護ステーション ひより 多田 みゆき

静岡県医師会が派遣する日本医師会災害医療チーム（JMAT）に富士宮医師会より関医院の先生が参加する事になり声をかけていただきました。看護師として、自分は何が出来るのだろう、こんな自分でも何か出来ることはないだろうかと考えていた時だった為、即参加することに決めました。

5月7日から13日までの7日間の日程で、支援先は福島県相馬市です。チーム編成は医師1名、看護師3名、事務員1名です。

深夜0時に出発し7時には相馬市に到着。すぐに被災地へ赴き、黙祷。実際に目にする光景はテレビとは大違いで、あまりにも悲惨な状況に言葉がでませんでした。田畑だった所は津波で海水が入り込み、流木と半分泥に埋まった車や船、何故ここにと思う所にテレビや冷蔵庫があり、見渡す限り何もない状態で泥だらけの平原が続いていました。住宅地だった所も瓦礫の山でした。かろうじて基礎が残っているのでここに家があったのだとやっとわかるくらいでした。海から2・3km離れた道路に船が何艘も乗り上げている。何とか残っている家を見てみると中は泥だらけで、窓ガラスは粉々に割れていてカーテンはボロボロに引き裂かれ何もない状態、曲がった鉄骨だけがかろうじて残っている家もありました。

生活の音がまったくしない、風の音と雨の音だけがやたらと響いている、破壊されたゴーストタウンのようでした。被災者の方々はどんな思いでこの風景を見たのだろう。自分の家があったであろうこの場所にどんな思いで立っていたのだろう、と思うと胸が張り裂けそうになり涙が止まりませんでした。計り知れない喪失を体験し痛みを受けた人達に看護師として、どう寄り添っていけばよいのだろうか、寄り添うことができるのだろうかと思つた状況を目の当たりにし不安な気持ちの中、人として当たり前の思いやりと配慮、言葉掛けを大切にしながら、少しでもその方の心の痛みに寄り添える看護をしようと決意しました。そしてこの光景を決して忘れないと。

医療サポートチームとしての支援活動は、相馬市の保健センター所長がコーディネーターを行い、静岡JMAT、石川JMAT、日本薬剤師会、精神科こころのケアチーム、保健師チーム、歯科チームが全国からローテーションを組み参加しています。朝8時30分から保健センターで全体ミーティングを行い9時には避難所に向かいます。私たち静岡JMATに薬剤師が加わり、静岡県医師会のネーム入りベストを着用し、午前中に3ヶ所、午後から2ヶ所の避難所と仮設住宅を回ります。内容は避難所住民の方の診療と薬の処方、健康管理と心のケアです。診察の結果、他のチームのケアが必要な時は直ぐに連絡を取り訪問してもらうなど常に連携を持ちながら巡回します。一日の患者数は約18名程度で、咽頭痛、痰が

らみ、咳などの呼吸器疾患の訴えが多く聞かれました。風邪の病気と共に避難所における埃等の影響もあるかと考えられます。中には夜眠れないといった心のケアが必要な方もいました。そして夕方5時より再度ミーティングが行われ、その日の報告と問題点が協議されます。それぞれの専門家が役割を明確にし、他チームとの連携を密に協働した日々でした。

避難所の皆さんは一見元気そうに笑顔でいらっしゃいましたが、お話を伺うとやはり辛いものがありました。「一生かけて築き上げてきたものが自分の目の前で一瞬にして無くなってしまった」「目の前で流されていく顔見知りの人達を見てもどうすることも出来なかった」「妻が亡くなった」「助けに行った息子が津波にのまれてしまった、家族も親戚も家も車も、何にも無くなってしまった」と。仮設住宅で寝たきりの男性を診察した時、元気がない妻に気付き、「大丈夫ですか、夜眠れていますか、ご飯食べられていますか」と尋ねると「どうでもいいんです、もう、どうでも」と言い、「ふう…」とため息をつかれて。とても辛く返す言葉も見つからず、妻の手をぎゅっと握ると、「看護師さんの手あったかいね、ありがとう」と少し笑みを返してくれました。心がとても痛かったです。被災者の方と出会い、必死に前向きで頑張る姿に人間の強さを感じると共に、辛い中にも見せてくれたあの笑顔を私は忘れることが出来ません。生きている、命がある、命さえあればどんな状況になったとしても、どんなに辛いことがあったとしても、また頑張れる、また笑える日がきつとくる、だから今どんなに辛くても必ず乗り越えていける。被災者の皆さんから教えていただきました。

災害支援に参加させていただき、多くのことを学ばせていただきました。そして、看護師として今この場所で自分の出来ることを一つ一つ頑張っていくことが被災者の方を応援し、共に頑張っていくことにつながるのだと。

相馬の皆さんに出会えたことに感謝し、東北の一日も早い復興と、皆さんの顔に心からの本当の笑顔が一日でも早く戻ってくれることを心よりお祈りいたします。





看護学生からみた訪問看護のイメージ

静岡済生会看護専門学校 1年次生 市川 さやか

私は今年の3月まで、静岡県訪問看護ステーション協議会に事務員として勤務していました。仕事を通して訪問看護に魅力を感じ、私も訪問看護師になりたいと思い、今年の4月から看護学校に通っています。私の通う学校で訪問看護の講義が始まるのは2年次生、実習は3年次生で行われます。まだまだ訪問看護について勉強不足な私が、「学生からみた訪問看護のイメージ」というテーマで文章を綴っているものか不安もありますが、ステーション協議会での仕事を通して感じたことや、学校に入って学んだことを元にお話させていただきます。

2011年6月4日の静岡新聞に、県内の高齢化率が23.8%で過去最高値を更新したという記事が掲載されていました。高齢化率の上昇と共に、疾患を抱えたまま在宅療養する人が増えています。また、入院日数の短縮化によって、以前に比べて医療依存度が高い人も在宅で療養していると聞きました。その反面、核家族化や共働き世帯の増加、高齢者単身世帯の増加によって家族介護力は低下しています。疾患や障害を抱えた人やその家族が自宅で安心して生活するために、訪問看護の役割は大きいと感じます。

先日初めての病院実習がありました。実習で聞いた看護部長のお話の中に「当病院にも訪問看護ステーションがあるが、利用を希望する人が多く、全ての人を受け入れることは難しい状態」という言葉がありました。訪問看護の利用を希望する人は年々増加していますが、受け入れる訪問看護ステーションの数は伸び悩んでいます。訪問看護ステーションが増加しない原因として看護師不足があげられます。私がステーション協議会で働いている3年間に、残念ながら廃止となってしまった訪問看護ステーションの多くは、人員確保が難しいことを廃止理由としてあげていました。

病院勤務と、訪問看護ステーションで勤務することの1番大きな違いは、「訪問看護は一人で利用者さんのお宅に伺い看護する」ということだと思います。訪問看護師には看護の知識や技術だけでなく、判断力やコミュニケーション能力の高さが求められるのではないかと、これが学生である私が感じている訪問看護への壁です。私は訪問看護師になりたいと看護学校に入学しましたが、卒業後すぐに訪問看護ステーションで働くことは難しいと考えています。在宅で療養されている方の抱える疾患は多岐に渡ります。しかし、学生のうちに実習等で実際に目にすることができる疾患は限られていること、点滴や注

射といった手技は臨床の場で経験を積むことで自信を持って行うことができるようになること、これらを考えると何年か臨床経験を積んでから訪問看護にいく方が、自信や安心感を持って看護ができるのではないかと考えるからです。学生だけでなく、今病院や施設等で働く看護師にとっても「訪問看護は難しそう」、そんなイメージがあるのではないのでしょうか。また、クラスメイトの中には入学するまで訪問看護を知らなかった学生もいます。看護学生の中にも訪問看護がまだまだ浸透していないと感じます。今後、講義や実習を通して訪問看護に関心を持つ学生が増え、一緒に訪問看護師を目指してくれたら心強いなと思っています。

最後に、自宅で療養することの意義を私自身が身をもって感じた経験をお話したいと思います。2年程前、祖父が自宅で倒れ病院に運ばれました。祖父は80歳を越えていますが、これといった病歴がなく元気そのもの。そのため大の病院嫌いでした。入院前、激しく咳をしていたため何度も受診を勧めましたが拒否。結果的には救急車で運ばれ重症肺炎で即入院となりました。治療を受けて肺炎は順調に回復しましたが、臥床状態が続いたことで自力歩行は難しくなり、食事も摂れなくなりました。また、支離滅裂な言動が増え、夜中に大声を出して暴れるため、病院から「すぐに来て欲しい」と何度も電話がありました。入院による一時的なせん妄は仕方ないと思っていましたが、身体まで弱ってしまった祖父を見て、退院しても昼間の介護が困難なため施設に預けようかと家族会議を開いたほどです。そんな状態で退院してきた祖父ですが、自宅に帰った初日こそ介助をしなければ動けない、食事も摂れない状態でしたが、翌日には祖母の世話を焼き始め、その翌日には一人でスタスタと歩き始め、近所の定食屋さんに出向いて大好きなお酒まで飲む始末。退院3日目には入院中の姿が嘘のように心身共に入院前と変わらない元気な祖父に戻ってしまいました。その姿を見て唖然としたのと同時に、ほっとしたのを覚えています。普段、あまり意識することは少ないですが、住み慣れた家で過ごすこと、好きなものや人に囲まれて生活すること、家庭や地域の中に自分の役割があること、これらは楽しみや喜び・生きがいを生み出し、その楽しみや喜び・生きがいが身体や心の健康に繋がっていくことを感じた出来事でした。この出来事が、在宅療養を支える訪問看護師を志すきっかけの1つになったことをお伝えしておきます。



平成23年度 静岡県訪問看護推進事業研修会のお知らせ

本年度も「訪問看護ステーションの看護師研修」「医療機関の看護師等研修」「在宅ターミナルケア研修」「在宅ターミナルケアアドバイザー派遣」の事業を実施します。日程・内容は次のとおりです。詳細につきましては、総会時に配布しました研修一覧とホームページをご参照下さい。

募集は委託契約の関係で9月下旬頃の予定です。

【訪問看護ステーションの看護師研修】平成23年11月26日(土)～平成24年2月4日(土) 5日間

退院調整（医療機関看護師との合同研修）、褥創・スキンケア、病院見学実習（1日）
フィジカルアセスメント、在宅リハビリテーション

【医療機関の看護師等研修】平成23年11月16日(水)～平成23年12月19日(月) 4日間

医療制度・訪問看護制度他、退院調整（医療機関看護師との合同研修）
訪問看護ステーション見学実習（1日）、これからの看護

【在宅ターミナルケア研修】平成23年度11月5日(土)～平成23年12月3日(土) 3日間

麻薬についての知識、在宅での看取りの実際とエンゼルケア、コミュニケーションスキル

【在宅ターミナルケアアドバイザー派遣】

在宅での看取りの推進を図ることを目的として、皆様のステーションへ緩和ケア認定看護師等をアドバイザーとして派遣致します。初めて応募されたステーションを優先して決定しました。

平成23年度 訪問看護セミナー開催のお知らせ

今年度より、新たに協議会主催のセミナーを開始しました。初年度は3講座を実施します。

8月20日(土)に第1回目、「実践に活かす家族アセスメント」を開催しました。今後の予定は次のとおりです。詳細につきましては、総会時に配布しました研修一覧とホームページをご参照下さい。

第2回 平成23年10月15日(土) 「在宅ケアに活かすアロマケア」

第3回 平成24年3月17日(土) 「症状・徴候別アセスメント」



編集後記

今年は記録的な猛暑でしたが、身近に熱中症の方はいらっしゃいませんでしたか？

電気使用量を気にしつつ、冷房の調節をし、車のエアコンは最高に効かせての訪問でしたね。



今年度より広報委員メンバー3名全員交代となりました。新しい紙面作りができる様頑張りますので、皆様の御投稿お待ちしております。

シェイクハンドNo.33

2011年9月発行

発行所 静岡県訪問看護ステーション協議会

静岡市駿河区南町14-25

Tel 054-202-1752

Fax 054-202-1753

e-mail sizuokahoumonst@cy.tnc.ne.jp

発行人 佐藤 登美

編集者 石井 由美（訪問看護ステーションなかいず）東部

竹澤まゆ美（訪問看護ステーション 萩）中部

大澤 三枝（袋井市訪問看護ステーション）西部